

## 自著紹介

## 『金融恐慌のマクロ経済学』

経済学部教授 二宮 健史郎

当たり前のことであるが、附属図書館に一步足を踏み入れると多くの学術図書が所狭しと並んでいる。インターネットや携帯電話等の急速な普及で多くの情報が非常に簡便に得られるようになったが、これからも図書館は「知の源泉」であり続けることは間違いないであろう。大学は教育機関であると同時に研究機関でもある。そして、大学の教員は自らの研究成果を著書、論文という形で公表することを生業としており、その成果は大学での教育に還元されている。昨年の12月、私も『金融恐慌のマクロ経済学』（中央経済社）と題する著書を刊行し、それは図書館の片隅にひっそりとたたずんでいる。

新生生の皆さんが生まれた頃、日本経済は大きな転換期にあった。1990年、史上空前の好況（バブル経済）が株価や地価の下落とともに崩壊し、都市銀行や大手証券会社、生命保険会社の経営破綻が相次ぐ等、日本経済は極めて深刻な状況に直面した。また、90年代の後半には、アジアの通貨危機といった金融危機が世界各国を襲い、深刻な打撃を与えている。

しかしながら、現代経済学の主流派である新古典派経済学では、貨幣の中立性という言葉が示すように実物経済と貨幣、金融の関連が全くと言っていいほど無視されている。これに対し、異端の経済学者ハイマン・ミンスキー（Minsky(1975)(1982)(1986))は実物面と金融面の相互関係を強調し、資本主義経済に内在する複雑な金融構造が経済の不安定性、循環を引き起こすことを強調する金融不安定性仮説を提唱した。本書は、このような金融的要因によると思われる経済の不安定性を、ミンスキーの金融不安定性仮説に基づき非線形経済動学的手法を用いて考察したものである。

関連する過去の研究を丹念に調べ、そこに自らの知見を加えて著書として公表するという知的営みは、膨大な時間を要するとともに実に地味な作業の連続である。そして、その営みが可能となるのは、多くの方々の有形無形のご助力が必要不可欠である。例えば、附属図書館が有効に機能していなければ、研究活動は著しく困難なものとなる。

私のような凡庸な経済学者の著書が学会や社会に大

きなインパクトを与えることができるかと問われれば非常に心許ない。それでもなお著書を刊行するのは、『OUT-PUTするのは思考の完成品だけでなく、むしろ思考の製造過程そのものだということである。思考の製造過程はもちろん不完全であり、そのOUT-PUTはしばしば「恥を晒す」ことにもなりかねない。しかしながら、これは全く「恥」ではなく、思考の過程をOUT-PUTしないことこそ研究者にとって恥である・・・(中谷武(1990)『置塩信雄教授の経済学』『国民経済雑誌』第162巻3号)』という数理マルクス経済学者で、私も研究会等でご指導を頂いた故置塩信雄先生(元神戸大学名誉教授)の教えからである。

名著や優れた研究は、良きにつけ悪きにつけ社会に多大な影響を与える。そうではない大多数の著書にもその著者の人生が籠められているのである。図書館は「知の源泉」であるとともに、学者の人生の縮図が収集されているとも言えるであろう。平和な時代に生き、著書を刊行することができたことは幸いなことであり、本当に有難く思う。また、有形無形のご助力を頂いた方々にも心より感謝申し上げたい。

